校 長 室 だ よ り（No.28）

令和５年１月 16 日
丹波市立黒井小学校長
谷口　千尋

電子図書の活用

この 10 月から丹波市の図書館においても電子図書の貸し出しが始まりました。本校では、昨年度から黒井小学校 PTA の協力を得て、電子図書サービスを活用しています。本年度につきましては、School e-Library（スクールイーライブラリー）を活用しています。これは、小中高等学校向けの電子書籍の定額制読書サービスで、41 人が同時に同じ本を読むことができます。

導入の理由は、児童１人１台の端末と、高速大容量のインターネットを整備する「GIGA スクール構想」の前倒しが大きな理由です。児童１人１台の端末の活用を考えたとき、特に長期休業日などの本を読むのに適した機会での有効活用を考えました。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、自宅待機を余儀なくされた児童への学習手段の一つとして、外出しなくても調べ学習が可能であったり、好きな本が読めたりするのは、学習習慣の維持に有効であると考えました。

現在、丹波市の電子図書館のアカウントも持っている本校の児童は、187 人中 85 人です。家庭での読書や学校の図書の時間、調べ学習に活用しいます。また、前述の School e-Library（スクールイーライブラリー）も、国語の時間を中心に図書の時間等に活用しています。

この３学期においても１年生「むかしばなしをたのしもう」（東京書籍）では、興味を持った昔話の本を探すことや読んだ昔話の中からおもしろかったものを選んで、好きなところを発表する学習をします。電子図書は、本を自分の端末で自由に読めることから、読書に集中し、多くのお話しに短時間で親しむことが可能です。新学習指導要領が示す「主体的な学び」「対話的な学び」に有効であると考えます。

２年前、コロナ禍での「学校休業中の学校図書館の取り組み事例」では、「時間を区切っての図書の貸出し」、「分散登校日を活用した図書の貸出し」、「靴箱をポスト代わりとした貸出し」、「学校職員によるおすすめ絵本の紹介」にとどまっていたのが現状です。実際の図書館現場では、電子書籍や電子資料の活用が積極的に始まっていたことを考えれば大変残念なことだったと思います。　ただ、未だに多くの学校図書館が、電子図書館の導入にほど遠く、紙の本による読書活動を中心に据えているのが現状です。

学校の図書館は、以前から言われていますように、子どもたちが何かを知りたいと思ったときに自由に調べることができ、疑問を解決する場であってほしいと思います。とくにデジタルは調べる作業に向いています。学校は信頼・安心できるデジタルコンテンツを児童生徒に提供していくことが求められていると考えます。電子図書にも一長一短がありますが、紙の書籍と電子書籍の良いところをうまく使い分けていくことが大切だと感じています。